

Noto PLUS



農業高校
水産コー

石川県立能登高等学校

石川県立能登高等学校(水産)



とく ほん へい ぴら
特産柿「平」
 ○能登高地域創造科 農
 12名が能登の特産品
 使ったパイの試作を完成させました

柿を「キルシュ」に浸した後、ポスト投に
 仕上げました。平核無柿のペースにチーズや
 ヨーグルトなどと混ぜたりなど、音響向けの味に
 なるよう思考をこらしました!(^^)
 パッケージデザインや商品名なども
 私達で考えました。
 ぜひご賞味下さい♡

能登パイ
3個1000円

能登の特産品使って開発 自信作がついに商品化!

能登高校地域創造科の生徒と合同会社菜夢来(さむらい ひらたねなし)が協働で商品開発。平核無柿などパイ3種類を、石川の農林漁業まつり会場で販売しました。

(10月15日・金沢市)

建築物として町内唯一の指定、
県有形文化財「中谷家住宅」の母屋

地域おこしの核として集落と共に歩む 「現代の庄屋」中谷家

地元の有志が準備した商品が
来訪者の好評を得ている「とま市」

400年間続いてきた 地域の財産を未来へ

「地 域のにぎわい作りの核となる場所を作りたい」—そう

話すのは第12代当主の中谷直之さん。中谷家を核として、地域おこしにつなげようと奮闘しています。

中谷家は江戸時代中期から黒川村の庄屋として地域と共に歴史を刻んできました。「中谷家住宅附屋敷構え」として県の文化財指定を受けています。建築物の県有形文化財は町内で中谷家だけです。



石川県指定建造物（昭和61年3月22日指定）

中谷家住宅附屋敷構え

なかたにけじゅうたくつけたりやしきがまえ

江戸時代に黒川村の庄屋であった中谷家の住宅。史料から江戸時代中期後半の建築と推定され、母屋のほか、奉公人棟や庭園など、豪農としての生活様式を今に伝えます。総輪島塗の蔵もあり、地区の文化振興拠点であった往時の姿がしのばれます。

かつて中谷家は観光地として公開され、能登半島プームの際などには多くの人が押し寄せました。しかし、平成に入ってから、住宅を管理していた

父・和夫さんの健康の不安などから、修繕や来客の対応が追いつかない状況でした。両親が他界した平成23年7月以降は、無人となり閉鎖されていました。「中谷家を何とか残したい」と考えていた直之さんは任意団体「庄屋計画推進委員会」を立ち上げ地域づくり活動を開始しました。そのきっかけとなったのは、出勤前の社会人が学ぶ市民大学「丸の内朝大学」との出会いでした。

「ものづくり展」に訪れた柳田中の生徒



能登が持つ可能性に

東京からの応援団

平成25年7月、東京の会社員らが学ぶ市民大学「丸の内朝大学」

で能登を題材とした講座が開かれました。「日本を地域からデザインする！能登編」と題し、5つのチームが設けられ、そのうち「能登の里山里海チーム」の8人が能登の里山地域の魅力を高める方策を考えました。

能登を訪れてフィールドワークに臨



輪島塗で提供される「そばきり仁」のもりそば

むなど、講座は計8回におよび、11月には受講生とその知人たちが東京から中谷家を訪れて、キノコを使った料理に舌鼓をうちながら地域振興策について語り合いました。

丸の内朝大学の講座は終了しましたが、受講生の有志が「里山ヨバレ隊」を結成。地元の人で結成した「黒川創生会」と中谷家の建築物や黒川集落の調査を行っている石川工業専門学校（石川）の学生も参加し、農作業や山菜採りなど活動体験で交流。活動が継続することにより、参加者も増えていきました。

朝大学OBから

つながる人の輪

丸の内朝大学の元受講生、野口正之さんは能登に通い続け、「里山ヨバレ隊」として活動している一人です。イベント参加やウェブサイトの作成に加え、里山らしい風景が広がる黒川地区の四季をカメラに納めています。ものづくり展では「里山写真展」として、撮影地の地図と共に写真を展示しました。

「歴史的背景があつて、建築物としても居心地の良い癒される空間」と中谷家について語る野口さん。加えて、庄屋と地域のつながりが薄まってきている中で、「都会人を受け入れ新しいつながりを



野口正之さん
(千葉県船橋市)

作ろう」と行動する中谷直之さんと地域の人の温かい心にも魅力を感じています。

今後も中谷家を核とした「里山ヨバレ活動」や、ウェブサイトや機関誌を通じ、都会に住む若者やファミリーを能登の里山に呼び込むことに加え、地

域の隠れた資産を発見して、活用していくことを目指しています。

里山の記録を残し

つながる人の輪

中谷家を中心とする庄屋計画推進委員会はこの秋、フリーペーパー「へそのへそ」を創刊しました。「当時を知る在所の人の記憶を訪ね、次代に伝え残すとともに、今を生きる地域の人の活動を記録していく、岩井戸地区発の里山ノート」です。

創刊号は、岩井戸の四季の里山風景や祭礼などを写真で大きく見開きで紹介。中面に貼り込まれた読み物では、中谷家当主に聞く昭和時代の中谷家と、ここ3年の様々な変化を紹介しています。また、6月から中谷家内にオープンした「そばきり仁」の小林仁さんには、20年近くになる能登との関わりやそば打ちへのこだわりを聞いています。

この「へそのへそ」を制作しているのは、東京でデザイナーとして活動する金子英夫さん。昨春に公開された能登杜氏を描いたドキュメンタリー映画

「へそのへそ」創刊号。表紙は中谷家の門横に立つ椎の木。里山の暮らしをじっと見つめてきたひとりです。



「へそのへそ」創刊号。表紙は中谷家の門横に立つ椎の木。里山の暮らしをじっと見つめてきたひとりです。



「二献の系譜」(石井かほり監督)のアーカイブディレクターを務めました。その縁あつて能登をたびたび訪れ、その魅力に心奪われていると言います。今後も中谷さんや里山ヨバレ隊の野口さんとともに、地域の協力のもと制作を進めていくとのこと。冊子による里山の魅力発信に期待がかかります。



「能登・ものづくり展」開催期間中に展示された、野口さん撮影の写真



「里山を表している風景」として野口さんがベストショットに選んだ「春のスケッチ」。自主製作のカレンダー表紙にも採用しました。里山は「水と緑と土と人の営みが共存する場所。自然を守り、自然の恩恵を受けながら人が暮らしている日本らしい文化」と考える野口さん。里山の魅力が凝縮された一枚です。

ものづくり展がつなぐ 人と文化

中谷さんは住宅を開放し、10月8日から9日間の日程で「能登ものづくり展」を開催しました。中谷家

がかつて、地域の文化の拠点としての役割を果たしていたことにちなんだものです。能登を代表する5人の作家が参加し、作品を展示。会期中は多くの人を訪れました。この取り組みは今年で3回目となります。

ものづくり展の開催を後押ししたのは、「合鹿椀」の創作活動にあたって



柳田中の生徒に総輪島塗の蔵を案内する中谷さん



です。参加した輪島塗や草木染め、珠洲焼などの作家は大宮さんと親交のある人たち。バラエティ豊かな作品展示につながりました。

展示スペースは座敷や縁側など。作家ごとに区画を割り当てることはせず、建物を自由に活用して作品が展示されました。

「5人の作家さんがそれぞれ持つつながりで、いろいろな人が集まって相乗効果が出てくれれば」と、中谷さんはものづくり展を通じたにぎわい作りを期待を寄せています。大宮さんが合



鹿椀の講演を柳田中学校で行った縁で、柳田中の全校生徒が会場を訪れ、作品を鑑賞し、中谷家の建物を見学。能登の作家の作品に触れるとともに、江戸時代の庄屋の暮らしに思いを寄せました。

地元のお母さんが商品を持ち寄り即売する「どま市」も新米や野菜、キノコなど旬の食材を取りそろえました。これらの商品やそばを求め、展覧会期間中に何度も訪れる人もいました。

「ものづくり展」を実施
工芸家・合鹿椀作家

大宮静時さん



中谷さんから打診があり、3年前に能登ものづくり展をはじめました。初回は近隣に住む人や30代のU・ターナー者などの若い人が多く来場してくれました。2回目は口コミで広がったのか県外の人が多く、3回目となる今回は、近隣の人も遠方の人もどちらも来てくれます。回数を重ねるごとに客層が変化しています。今年はそば店が開店していることから昼時に人が多く、滞在時間も長いように感じます。

来年は珠洲で奥能登国際芸術祭が開催されます。芸術祭目的に全国各地から訪れる幅広い客層の人に、ものづくり展を通じて、この場所を知ってもらいたいと考えています。

そば店開業で

年間通じた開館

中 谷家では今年6月からそば店「そばきり仁」が入居していま

す。店主の小林仁さんは仕込み作業を終えりと中谷家の戸を開き、午前10時から午後4時までそばと喫茶の営業をします。営業終了後は戸締まりを行うなど、中谷家の公開に大きな役割を果たしています。

小林さんは20年前に横浜から能登に移住しました。そば店を平成25年に穴水町で開業し、人気を博していました。が、建物の都合で移転することとなりました。その時、住宅の利活用について考えていた中谷さんと常連客を通じて出会いました。

そばに対してこだわりを持つ小林さん。黒い殻を丁寧に取り除いてから石臼でそば粉をひいて、手打ちで仕上げ



「そばきり仁」店主
小林仁さん



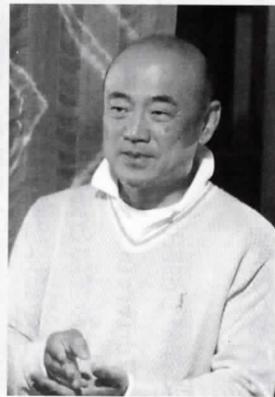
中谷家の一角に設けられた厨房スペース。
この場でそばも打っています。

ています。そばの実は福井県大野市から取り寄せています。そばの風味を味わって食べてもらうため、穴水町で開店していた際は、もりそば一筋でした。中谷家に移転してからは、温かいそばや天ぷらなど新メニューを取り入れました。「だしの取り方など全く異なり、難しかった」と振り返ります。もりそばで食べてもらうのが理想であるという考えは変わりませんが、温かいかけそばを喜んでくれるお客さんの姿を目にし、手応えも感じています。

小林さん自身が移住者ということもあり、能登半島一円から移住者が店を訪れてくれるそうです。小林さんは「移住に関して困ったことがあったら、相談にのりたい」と話します。移住者のネットワークで、中谷家とのつながりを持つ人が、さらに増えていきます。

中谷家12代当主

中谷直之さん



中谷家住宅のように、大きな建物の文化財を個人で所有している例はあまり多くないと思います。建物は所有していますが、家を継いだという気持ちはありません。地域とともに歩んできた大切なものを預かっているという感覚です。このつながりを次の世代に渡すのが使命です。

過疎地での地域振興で大切なのは、人を呼ぶ力です。自分たちで実現可能な絵を描いて、一人二人の活動からでも少しずつ、町を良くしていきたいと考えます。人を呼ぶためには受け皿作りが重要ですが、時間のかかる作業ではありません。地域に核となるものが必要になります。核となる場所で活動を継続することで、仲間意識が芽生え、人と人の関係づくりができるようになります。地域の素質を見いだして、組み立

てることを組織として行い、活動を広げていくことが大事です。

6月から「そばきり仁」が開店し、「どま市」とあわせて、年間を通じてお客さんを受け入れられる体制になりました。どま市では、地元「黒川創生会」のお父さんお母さん方が店番をします。来訪者には「この場所に来れば誰かがいて話ができる」という魅力を感じていただいています。ものづくり展のようなイベントと組み合わせることで、食や工芸などさまざまなものがミックスされ、多様な目的意識を持つ人が集まって、会話やコミュニケーションを楽しむことができます。

丸の内朝大学の受け入れも「できること」を探す試みの一つとして実施しました。丸の内朝大学をきっかけに、建築関係者やデザイナーなど、プロフェッショナルも関わってくれるようになりました。交流を続け、関係をつないでいるから、活動に広がりが出てきました。石川工業専門学校の学生にも農作業体験を行ってもらっています。単なる手伝いではなく、地元の人と料理づくりを楽しんでもらうなど、楽しい思い出が残るから継続していきませんかと思えます。地域の人の負担にならないよう、「楽しみ」を大切に、活動していきたいと考えています。



合鹿碗

【ごうろくわん】

ものづくり展開催の原動力となった大宮静時さん。旧柳田村に伝わる「合鹿碗」の製作に取り組んできました。「合鹿碗」の名称は町が商標権を持っていますが、大宮さんはその名称の使用を許されている一人です。

能登半島では輪島塗が有名。輪島塗は木地の製作や塗りの工程を分業で行っていますが、合鹿碗はすべての工程を一貫製作します。また、漆器の強度を増すために、輪島塗は珪藻土を、京漆器では「との粉」を塗る工程があります。合鹿碗は、炭焼きが盛んだったことから、木炭を柿渋で塗り強度を確保しています。柿渋を用いるのは平安期に確立した手法であるとされます。

大宮さんは今年、上町公民館で合鹿碗作りの講師を務めました。地域に伝わる特徴的な文化を後世に伝える公民館の取り組みで、住民9人が木地に炭粉を塗り、漆を重ね塗りするなどして製作を体験。地元につながる伝統工芸品に親しみました。



上町公民館で合鹿碗製作教室の講師をつとめた大宮さん

柳田中学校で合鹿碗について講演し、その魅力を伝えました。このことがきっかけとなり、全生徒の中谷家訪問が実現。若い世代にもものづくり展と中谷家に触れてもらうことができました。

「合鹿碗の魅力は地域性、人間性を表する、能登の地に着いた力強さです」と大宮さんは話します。世界に魅力が知られているのは、この土着性が注目されているからではないかと考えます。地域に住む人が、自らの地域に伝わる伝統文化に触れてほしい—大宮さんはそう願っています。



【てんりょうしょうや】

天領庄屋

天領とは江戸時代の幕府直轄領のこと。能登には62カ所あり、黒川村もその一つです。

中谷家は黒川村の庄屋として司法や行政など、村を取り仕切る役目を果たしてきました。当時の庄屋は文化の発信拠点でした。総輪島塗の蔵を作ったことから、その当時の当主の気概をうかがい知ることが出来ます。

この役割を現代につながるのが中谷直之さんの取り組みです。地域振興や情報発信など、現代版の庄屋として、これからも挑戦は続きます。

公開時間 午前10時〜午後4時

※12月から翌年3月半ばごろ

までの間は冬季休業

園庄屋計画推進委員会

☎ (76) 1551

そばきり仁

☎ 080-5876-0020

※「そばきり仁」は毎週水曜と、

第一・第三火曜休業

中谷家の公開について

中谷家の開館は当主の中谷直之さんと地元・黒川創生会、「そばきり仁」の小林さんが行っています。お店の休業などによって見学できない日もありますので、事前にお確かめください。冬期間は積雪などのため、公開をお休みしています。